

# 教師教育者としての山内は、 セルフスタディをとおして どのように変容したのか？

—教師教育者コミュニティの意味—

山内敏男（兵庫教育大学）  
大西慎也（京都ノートルダム女子大学）



# 本発表の内容

- セルフスタディ実践者である山内の変容
- クリティカルフレンドとしての大西の役割
- 重要な教師教育者コミュニティー



# リサーチ・クエスチョン

- 教師教育者である山内は、どのような自身の教師教育実践の改善策を発見できるか。
- クリティカルフレンドである大西は、山内の語りに寄り添うどのような方法を探し出すことができるか。

# 研究方法

## 五つの焦点

- ①個に根ざした探究
- ②クリティカルで協働的な研究
- ③学びの改善
- ④透明性のある体系的な研究プロセス
- ⑤知の生成と発信



## 本研究への適用

- ①山内の状況や思いを尊重しながら掘り下げていく
- ②コミュニティの構築
- ③山内の教師教育実践の改善
- ④研究の手続きを明確化し、過程を開示する
- ⑤教師教育者コミュニティとしての発表

# コミュニティのあらし

セルフスタディ実践者

山内敏男（兵庫教育大学大学院）

小学校教員として9年，中学校教員として15年

- ①教職大学院教員として教員養成に携わり5年目
- ②着任当初3年間社会系教科に限らず指導方法・授業開発，  
教員養成・研修にかかわる授業を担当
- ③実践知を捉え直し、（多様な）形式知が獲得できる授業・  
研修のあり方を模索
- ④構想と実際、授業者と学習者とのズレに気づき改善できる  
協働性を重視

# コミュニティのあらし

クリティカルフレンド

大西慎也（京都ノートルダム女子大学）

小学校教員として18年

- ①社会科教育にコミットしない同僚たちと大学教員として教員養成に携わり6年目
- ②社会科教育に苦手意識をもつ学生、現場教員
- ③自己の社会科観の伝達ではない講義、研修のあり方を模索
- ④ともに気づき、学ぶコミュニティを重視

# コミュニティのあらまし

## 山内と大西の関係性

兵庫教育大学大学院で研究を始める。

同じ研究室に所属し、山内が2年先輩。

博士課程も含め、先輩後輩の関係である。

社会科学教育に関する共通のコードを有している。

互いに尊重しあい、クリティカルな意見交換が可能な信頼性がある。

# 山内の個人的文脈

①学びのニーズを考慮した授業ができないのではないか。

「現職院生が一定の教科観以外を学びの対象と見なさい・・・」

②自身の実践知，研究により得た知見が生かせないのではないか。  
(そもそも知見があるのか)

「山内自身が社会科教育観を相対化できていないのではないか」  
という不安

# 1. 本学教職大学院が置かれた立場

## (1) 使命

「学校課題に即した学校マネジメント，教科指導，生徒指導，学級経営などについて，専門的知見に基づく高度の実践的指導力を修得させることにより，新しい学校づくりの有力な一員となり得る新人教員及び管理職候補者をはじめとするスクールリーダーとなるような現職教員として，他の教員集団を指導し得る中核的な教員を養成すること」。

(教員の資質能力向上に係る当面の改善方策の実施に向けた協力者会議「大学院段階の教員養成の改革と充実等について(報告)」2013年，[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/093/houkoku/attach/1340445.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/093/houkoku/attach/1340445.htm)，)

教職大学院：2020年現在，46都道府県，54大学に設置

## (2) 兵庫教育大学では・・・

現職教員に対し教育現場の課題を踏まえた学びの場を提供し、  
専門職として

- ・ 高度な専門性
- ・ 実践的指導力の育成が期待されている。

兵庫教育大学「ミッション」の第一



### (3) 実践の概要

## 「社会系教科におけるカリキュラムの変遷と マネジメントの実際」 (1年前期開設)

目標：各校の社会系教科におけるカリキュラムの変遷及びデザイン  
(構想・開発) とその運用, 推進のための体制に関する理論及び方法・技術の習得

の後半5コマを担当

## (4) 山内の立場における本実践を通しての目的

- ①教職大学院での社会系教科教師の養成に取り組む実践とリフレクションを通して、山内が実践の何にこだわり、何に気づき、どのように変容したのか実態を解明する。
- ②実態の解明により得られた成果と課題から、山内が教職大学院の教師教育者として研究で得られた知見、実務家教員としての実践知をどのように組み入れていくのか、授業の在り方、授業への構え、ねらいの妥当性について再考し、解決すべき実践的課題への示唆を得る。

## 2. 実践

### (1) 実践上の手続き

#### ① 学びの構想

- ・ 現職院生が潜在的にもつ授業理論に気づくこと
- ・ 種々の授業理論の特徴や課題をふまえた上で，選択・実践できることを意図し，論文レポートの発表と議論により「自己の社会科観を問い直す」

## ②授業の構成

第1講 社会系教科教育のマネジメント上必要なことを探索する

(1)事前アンケート と議論

(2)川口広美「『ねがい』を『ねらい』に変えよう」を読解する

①気づき・考えたことをワークシートに記入

②項目毎にまとめていく 適宜発言を求め要点を列記する

文献：川口広美「『ねがい』を『ねらい』に変えよう」『社会科教育』695号，明治図書，2017年，pp.20-23

第2講 社会科観を問う

(1)前回のシャトルシートの検討

(2)見方・考え方の分析を伴う社会科授業論類型

文献：豊畷啓司「意思決定の過程を内省し，認識の社会化をはかる社会科授業」社会系教科教育学研究第13号，2001年，pp.9-19

レポート：「社会科諸類型について」コメントする

### 第3講 歴史を切り口に、理論の多様性と自分の立ち位置を確認する

(1)前回のレポートの検討

(2)歴史教育授業論の類型を知る

文献：佐藤育美，桑原敏典「現代社会科歴史授業構成論の類型とその特徴」『岡山大学教育実践総合センター紀要』第6号,2006年，pp.1-10

レポート：「授業構成論の多様性について」コメントする

### 第4講 社会参加（参画），体験的活動の研究を検討する

(1)前回のレポートの検討

(2)社会参画の在り方を探索する

文献：唐木清志「社会科にサービス・ラーニングを導入する意義－"CiviConnections"における認識と実践の統合を手がかりとして－」『社会科研究』70号，2009年，pp.31-40

レポート：「子どもへの社会参画のさせ方について」コメントする

### 第5講 評価についての課題を把握する

(1)前回のレポートの検討

(2)評価の在り方を探索する

文献：峯明秀「社会科の学力評価論の批判的検討－学習の事実に基づく授業改善研究の必要性－」『社会科研究』80号，2014年，pp.33-44

最終レポート：「①社会系教科の教科観・②マネジメントについて」コメントする

### ③授業構想時に抱いていた困難さ

「学びのギャップ」

○現職院生の学びを充実させようとした場合、学卒院生に同じ教材（論文）をもとにした学びを要求できるか？

○授業のディテールのこだわりがちな学卒院生授業を自己の物差しで見る現職院生の「壁」



現職院生，学卒院生の双方にとって高度な専門性と実践的指導力を育成できる授業が成り立つのか？

# 大西の個人的文脈

①クリティカルフレンドとしての責任を果たすことへの不安

「同門ゆえ、甘えによる非科学的な取組にならないか」

「自身にクリティカルフレンドたる資質はあるのか」

②自身の教師教育実践の改善にもつながれば・・・。

# セルフスタディの実践

## (0) 研究の手続きを明確化し、過程を開示する

### ①データの収集

- \* 事前 1 回，実践中 3 回，事後 3 回と計 7 回にわたる対話。  
（5 月 2 1 日～9 月 1 1 日）にわたって。
- \* 対話の記録、メモ、講義記録、院生の社会科観変容の記録。
- \* 山内の講義受講者へのインタビュー。  
（インタビュー実施：9 月 2 日）

# セルフスタディの実践

(0) 研究の手続きを明確化し、過程を開示する

## ②データの分析

\* 質的研究（メリアム, 2004；佐藤, 2008など）

対話記録

受講者へのインタビュー

→山内（実践者自身）の変容を読み取っていく。

# セルフスタディの実践

事前 1 回， 実践中 3 回， 事後 3 回と計 7 回にわたって対話

## (1) 事前の対話

山内：「講義に対するねらい・・・， 多様な学生（全国からの様々な校種の現職院生， 学卒院生）が履修しており， それぞれの学びを充実させ， 期待に応えることが難しい。」

大西：「多様な学生がそれぞれが異なった立場であることを活かして， ディスカッションなどを行ってみては。」

山内：「毎時間フィードバックすることが大切。」

## (2) 実践中の対話

山内：「講義のねらいと結果の差について、自分が意図していた結果とはならなかった・・・。」

大西：「そもそも一つのゴールでよいか。山内さんが思っている（あるべき）院生観と院生の実際とがズレ、「兵庫教育大学の院生は...」という固定観念があるのではないか。」

（当初）「多様な授業観への気づきを得て欲しいと願う山内に対して、多様なことそれ自体が受け入れにくい受講者、授業観の強固さとの間でのズレ」

→院生なりにゲートキーピングしている

講義の目標に山内が縛られているのではないか。

### (3) クリティカルフレンドによる 山内実践の受講者である現職院生へのインタビュー

「社会科の成立みたいなところを改めて学ぶ中で、初期社会科が今やらなあかんことに近いな」

・・・カリキュラムについて考える

「山内先生の講義の中で、多くの先生方の論文を読んで、カリキュラムとか、社会的合意形成能力などの論文を、みんなで読んで考えていくことで、僕の中でだんだんつながってきて。」

・・・多様な社会観の受け入れ

「今、どのように社会に入っていくのかが求められていると思うので、そこについて考えたい。その授業のためにも、それまでに子どもにどんな考えをもたせるかだと思うので、両方考えていきたい。最終的には、子どもたちに社会参画させたいと思うので。」

### ・ ・ ・ 社会科観の相対化

「今院生に、高校・中学・小学校と全部現職がいるんですけど、みんな背景が違うから、もっている社会科観はすごい違うなという気がしていて、違う社会科観を聴けるのは刺激になるし、中高の現実を知ると、小学校で社会と関わるようなことをしておけば、中高でも生きてくるだろうなと。高校での主権者教育にもつながっていくのかな。」

### ・ ・ ・ 現職教員が派遣される教職大学院のメリット

## (4) 事後の対話

### 「現職院生へのインタビュー結果」を受けての山内の気づき

理論研究が不足している実務家教員としての不安である。そのことによる葛藤が、無意識に教師教育者である山内自身が講義の結果に拘ることにつながっている。

## 講義に対する山内の葛藤

多様な考え方を受容しているか、自身の社会科観を相対化しているかどうかへの不安

## 現職院生の実際

それぞれが多様な社会科観を受け入れ、自己の社会科観を相対化している

山内・・・多様な社会科観の受容し、自身の社会科観を相対化することを目的としつつも、その実態として一つの回答を求めていた。

(「実践知や研究により得た知見をどのように活かしつつ講義を進めるのか確信をもてていない点等、理論研究が不足する実務家教員としての葛藤と困難」を自身が抱えていたことによるもの)

山内・・・理論研究が不足しているのではという不安が、院生が経験知に拘りをみせた際にどのように対応したらよいのか、うまく導くことができるのかということへの困難さを感じていた。

実態・・・院生は、多様な社会科観を受容し、且つ自身の社会科観を相対化していた。

## 成果

- ・ 無意識に縛られていた行動への気付き
- ・ 院生が有する多様な社会科観を受容するのは教師教育者であり、そのことにより自身の社会科観を相対化させるのも教師教育者であることへの気付き

## 課題

- ・ 講義の目標＝達成されたとは言い難い。
- ・ 教職大学院の環境により、院生が学びを深めていたことに気付いていなかった。意図的な働きかけができなっていた。



多様な学生のつながりを教師教育者である大学教員が意識しておくことが重要

# 山内が得た示唆と展望

## 1 授業において院生が目指す目標の多様性を担保すること

- ・ 講義の目標に縛られない柔軟な対応
- ・ 2年間の学修を見据えた授業の構想
- ・ 講義による関わりに限定しない，教師教育者と現職院生，学卒院生のそれぞれが相互に対話できる意図的な働きかけ

→兵教大の資源である「現職院生の多さ」（スケールメリット）を生かして議論を促すような課題の提示が（特に課外の）学修につながる。

# 山内が得た示唆と展望

## 2 見解の受け入れと指導のバランスの見極め

→栗谷氏の先行研究成果の確認

- ・ 事前に目標や規準を示した上で、授業に際して理論や実践の特質や課題については提示，説明できるようにしておく。
- ・ 院生が自己の教科観や授業観，こだわりにゆらぎをもたせることができるような支援，例えば対話によって得た知見と自己の教科観（授業観も該当するであろう）とを対比させ，ズレへの気づきを誘発させる。
- ・ 教師教育者自身も教科観，授業観を問い続けるスタンスで院生に向き合うことが求められる。

# 山内が得た示唆と展望

## 3 留意点として

教師教育者，特に実務家教員は院生に対して理論や実践を闇雲に提示すること，院生に対して拙さや不十分さの指摘をしやすい立場であることに自戒すること。

現職院生と学卒院生それぞれが相互作用を促進していけるような支援が必要。

# 大西が得た示唆と展望

## 1 クリティカルフレンドとしての役割

- ・ セルフスタディ実践者の悩み、葛藤に寄り添う。  
→すべてを受け入れるのではなく、自身の考えも開示しながらセルフスタディ実践者の求めに応じる姿勢。

## 2 実践者とクリティカルフレンドの関係性

- ・ お互いに尊重しあい、クリティカルな意見交換が可能な信頼性が重要である。

# リサーチ・クエスチョンに対して

- 改善策が発見できるわけではなかった。しかし、改善策を発見するきっかけとして、自身の考え方や自身の課題、自身のこだわり気付くことができた。
- クリティカルフレンドに求められるものは、実践者と議論し、ともに考え、判断する、協働する意識（実践者にも必要）と関係性。

# 教師教育コミュニティの意味

## 1 コミュニティの重要性

- ・セルフスタディは個人の気づきにつながるリフレクションとは異なる。実践者もクリティカルフレンドも、気づきを支えあうコミュニティがあってこそ成立する研究である。

## 2 教師教育コミュニティの構築と広がり

- ・最少コミュニティ（2人）から始まり、少しずつ広げていくことが重要である。
- ・コミュニティが広がることにより、自身の実践の改善が、教員養成機関の取組の改善に広がるなど、学校文化の変容をもたらす可能性も十分に考えられる

# 教師教育者のためのセルフスタディー

本企画のテーマ

「教師教育者のためのセルフスタディー研究の  
歴史・思想から実際まで」

教師教育者は、教師や学生に「授業研究」「授業改善」の重要性を語る。つまり、教師を教育し、教員を養成する教師教育者こそが、自己の実践を改善するためにセルフスタディーに取り組むべきである。自己の実践を改善しようとしなない教師教育者には、教師や学生を教育する力は身についていかない。

# 参考文献

- Anastasia P. Samaras 『Self-Study Teacher Research』 2011
- 粟谷好子（2017）「附属学校教員が自己の実習指導を分析する意味—実習指導の改善をめざして—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』 pp. 67-74
- ジョン・ロックラン監修・原著、武田信子監修・解説、小田郁予編集代表、齋藤真宏・佐々木弘記編集（2019）『J. ロックランに学ぶ教師教育とセルフスタディ - 教師を教育する人のために - 』学文社
- カール・E. ワイク著、遠田 雄志翻訳（1997）『組織化の社会心理学』原書第2版、文真堂
- 佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法』新曜社
- S. B. メリアム：堀薫夫・久保真人・成島美弥訳（2004）『質的調査法入門』ミネルヴァ書房
- 渡部竜也（2010）「カリキュラム・授業理論と教師教育論の連続的探求の必要性—教科内容専門領域改革に向けた研究方法への提言：社会科を事例として—」日本社会科教育学会『社会科教育研究』110号, pp. 69-81

